

息子よ、君は今日百歳だ

玫瑰先生

(訳 横田勤)

医者は首を横に振った。彼の一回のため息が、私の一縷の望みを断ってしまった。

妻が難産で亡くなってから、私と息子は寄り添って生きてきた。息子が病にかかってからは彼を連れていろいろな都市、多くの病院を駆け回ったが、その結果はすべて「腎芽腫①」という診断で、しかもすでに全身の多くの器官に転移していた。息子はやっと六歳になったばかりなのに、命はたった三か月しか残っていないとは。

息子は入院していた。夜中、だれかが声を張り上げて泣いている声がかすかに響いてきた。きっとまた、命がこの世界から去って行ったのだろう。息子は目を開けて私をじっと見つめた。彼も確かに泣き声を聞いたのだ。

「パパ、だれかが泣いているのが聞こえたみたいだけど……」

私は息子を抱きながらそっと言った。「いい子だからね、お前は夢を見たんだよ！ パパには聞こえなかった」

息子は私の話を信じて、私の胸の中でぐっすりと眠りに落ちた。

早朝、私が息子にご飯を運んでいくと、息子がふとんを頭からかぶって、くぐもった声でこう言っているのに気づいた。

「パパ、ぼくは死ぬんだよね？」

私にはこの事実を否定することはできなかった。できるのはただ、彼の恐怖を軽くしてやることだけであった。

「何言ってるんだい、だれだって死ぬんだよ。もしみんなが死ななかつたら、地球上では立つ場所さえ無くなってしまわないか……」

「昨日の晩、^{チー}齊婆さんが死んじゃった」息子はふとんの中で言った。「パパ、ここにいる人はみんな死んじゃうんだよね？」

息子は私にたたみかけてきて、私は息が苦しくなった。ちょっとためらったあと、こう言った。

「そんなことはないよ。軽い病気の方は早く退院できるし、ちょっと重い病気にかかった人は、何日か多く入院しなければならないんだ。^{チー}齊婆さんのような人は年をとったから亡くなったんだ」

私は子供に重圧を与えないようにと、できるだけ気楽に聞こえるような口調で言った。

「でも、パパ、それが『老死』でぼくのは『少死』でしょう……」

息子は年を取った人の死は「老死」なので、子供の死は「少死」と言うのだと思っている。② 私には彼の言ったことを訂正することはできず、こう考えるのをやめさせる方法も分からず、ただ彼を胸にぎゅっと抱きしめ、涙が落ちるに任せていた。

突然、私はある事を思いついて尋ねた。

「お前は何歳まで生きたいかい？」

息子はちょっと考えて、少し恥ずかしそうにしながら笑った。

「パパ、100歳はダメ？『長命百歳③』って言うでしょう？」

私はうなずいた。「それじゃあ今から、日にちを逆にカウントダウンしよう。100歳から50歳、1歳、0歳にいて、生まれてから満一か月の日になるまで生きて、たったいま産室から看護師さんに抱かれて出て来た日まで生きるんだよ」

息子は明らかに私の提案に興味を持って言った。

「それじゃ、ぼくは今日 100 歳になったんだよね？」

「もちろんそうだよ」

私は急いでバースデーケーキを予約した。ケーキの上には「伍竹^{ウーチュー}の百歳の誕生日おめでとう」と書かれていた。箱を開けた瞬間、息子の目が明るく輝いた…

…。

息子に残された日にちが非常に少ないことを考えて、私は一日が一歳だと決め、何とかがんばって 100 日間生きてくれることを願った。

二日目、私は 99 歳の誕生日をどのようにお祝いするつもりか、と尋ねた。息子は私をモデルにして、私が球を打つ様子を描きたい、と言った。息子が描いた絵を見て、私は驚いた。画板^④では私が強靱で力強い人間のように描かれていた。画題は「私の心の中のパパ」で落款は「伍竹^{ウーチュー}99 歳画」とあった。

息子は「20 歳」になったその日、私に尋ねた。

「お父さん、この年のぼくは何をしないといけないの？」

「恋をして好きな女の子にプロポーズするんだ……」

私の話を聞いて息子は興奮し恥ずかしそうにした。

「それじゃぼくも恋愛しなきゃいけないよね？」

私はからかった。「好きな女の子がいるんだろう？」

息子は言った。「注射をしてくれる看護師の小美^{シャオメイ}が好きになったんだ。だって小美の注射は痛くないから」

私の心は切なさであふれそうになった。これが、息子が女の子を好きになった理由の一つとは。もし彼がこの病にかからなかったなら、ほんとうの 20 歳はどんなに明るい日々だったことだろう。

「パパ、ぼくの代わりに花束を買いに行って。小美姉さんに花をあげたいんだ」

その大きな薔薇の花束に、息子の頭はほとんど埋もれてしまいそうだった。

息子は注意深く花束を小美の前に差し出した。

「小^{シャオメイ}美姉さん、今日はぼくの20歳の誕生日です。ガールフレンドになってくれませんか？」

小美が恥ずかしそうに花束を受け取ると、息子は小美の顔にそっとキスをし「ありがとう、小美姉さん！」と言った。

薬を飲んでいる時も注射の時も、息子はこれからの日々何をすべきかと、私と相談した。息子の体はだんだん衰弱していったが、依然として子供の天性は変わらず、少しでも体力と気力がある時は、車椅子から降りて自分の足で歩いていた。

一歳の誕生日のその日、小美が化粧品を持って来て、息子の顔にちょっと頬紅を塗った。彼の青白い顔にはたちまちほんのり赤みがさした。息子は恥ずかしそうに言った。

「パパ、ぼくは男の子だよ。どうして化粧をしないとイケないの？」

「いっしょに写真を撮るからだよ、一歳の記念にね。化粧するのは当然だ、きれいに……」

息子は私の胸の中で、一歳の誕生日のろうそくを吹き消した。

息子は「満一か月」の時、衰弱しきっていた。少し動こうとするがすでにその力は失せ、いつ息子が私から離れていってもおかしくないことを、私は理解した。涙をこらえながら、私はやさしい声で息子に言った。

「赤ちゃん、動いちゃだめだよ。一か月になったばかりの赤ちゃんは泣いたり笑ったりはできるけど、話すことはできないんだからね」

息子は、分かった、という様子でうなずき、「それじゃぼくは話をしちゃいけないんだね？」と言って、自分が話をしてはいけないのに、今話したことに気づき、急いで私にあやまった。「パパ、ごめん、忘れてた……」

「かわいい赤ちゃん、一か月になったばかりの赤ちゃんは食べる時以外は眠っているんだよ。下の階のおばさんの赤ちゃんは、一日中食べては寝ていたし、食べている時だって眠ってただろう。覚えてるかい？」

私がそう言って思い出させようとしたら、息子はいっしょうけんめい考えて、それからうなずいた。しかし、息子が話したいことを聞く機会を逃してしまうかもしれないと急に怖くなり、「お前、もしパパに話しをしたいんなら話してもいいんだよ……」と言った。

私はただただ願った。息子が少しでも多く体力と気力を保ち、持ちこたえ、この父親のそばに長くいてくれるようにと。

息子は私の腕の中で長いこと眠っていたが、やっと目を覚ました。体力も気力もありそうで、何とかしてベッドから下りて自力で歩こうとした。私たちは病院のテラスまで行き、太陽が沈んでいくのをいっしょに見ていた。息子は私の手を握って言った。

「パパ、ありがとう。とっても楽しかったよ……」

私は、子供がもうすぐ私から去っていくのだと悟った。

息子が本当に生後一か月になったばかりの赤ん坊であるかのように、私は彼を胸に抱きながら子守唄を口ずさみ、そっとその体を揺らした。息子の目はゆっくりと閉じられた。まるでぐっすり寝入ったようだった。ぐっすり眠りそれから目を覚ます、今までと変わらぬ或る一日のように……。

① 腎芽腫 中国語では「腎母細胞瘤」。小児腎腫瘍のうちで発生頻度が最も高いとされる悪性腫瘍。ウィルムス腫瘍とも言う。

② 老衰で亡くなることを中国語で「老死」という。「老（年寄りである）」の反対語が「少（若い）」であることから、ここでは造語をしている。

③ 長命百歳：百歳まで長生きする、という意味で、長生きを願う言葉。

（中国語原文） **儿子，你今天 100 岁** 玫瑰先生

医生摇头和那一声叹息灭了我的最后一丝希望。

自从妻子难产而去，我和儿子便相依为命。儿子患病后，我带着他跑过无数城市、无数医院，结果无一例外，是肾母细胞瘤，并且已经转移到全身多个器官。

孩子才 6 岁，可生命却只剩下 3 个月。

儿子在医院住下。半夜，隐隐地传来号啕大哭的声音，一定又是某个鲜活的生命离开了这个世界。儿子睁开眼睛看着我，显然他也听到了哭声：“爸，我好像听见有人在哭……”

我搂着儿子轻轻地说：“乖，你做梦呢！爸爸没听见。”儿子相信了我的话，在我的怀里沉沉睡去。

清早，我给儿子打饭回来，发现他把头蒙在被子里闷声问：“爸，我不是会死？”

我没办法否认这个事实，只能减轻他的恐惧：“瞧你说的，谁不会死？要是人人都不死，那地球上连站的地方都没有了……”

“昨天晚上，齐阿婆死了。”儿子在被子里说：“爸，是不是住在这里的人都会死？”

儿子步步紧逼，让我透不过气来。犹豫了一下，我说：“当然不是，有些人病得轻，很快就能出院。有些人病得重一些，就要在医院里多住几天。像齐阿婆这样，只是因为年纪大了，所以就不在了。”我尽量让语气轻松，不给小东西压力。

“可是，爸爸，那是老死，我却是少死啊……”儿子认为年纪大的人死去是老死，小孩儿的死就叫少死。我没有勇气去纠正他，也不知道拿什么去阻止他这样的想法，只能把他紧紧搂在怀里，任泪水滴落下来。

突然之间，我想到了什么，问他：“你希望自己可以活多少岁？”

儿子想了想，有些羞涩地笑笑：“爸，100岁可以不？不是说长命百岁吗？”

我点点头，说：“那我们现在就开始倒着过日子。从100岁活到50岁、1岁、0岁，活到满月，一直活到刚刚从产房里被护士抱出来。”

儿子显然对我的提议很感兴趣，“那我今天是不是100岁了？”

“当然。”

我很快订了一个生日蛋糕，蛋糕上写着“伍竹百岁生日快乐”。当盒子被打开的一瞬间，儿子的眼睛亮了……

鉴于儿子所剩的日子不多，我决定一天过一岁，希望他可以熬过100天。第二天，我问他99岁的生日打算怎么庆祝。儿子说让我做他的模特，他很想画下我打球的样子。儿子的画让我有些吃惊：画板上的我坚强而有力，标题是《我心目中的爸爸》，落款是“伍竹99岁画”。

儿子20岁那天，问我：“老爸，这个岁数我应该干什么呢？”

“谈一场恋爱啊，追求一个你喜欢的姑娘……”

我的话让儿子既兴奋又羞涩：“那我是不是也要谈场恋爱？”

我逗他说：“有没有喜欢的女孩儿？”

儿子说：“我喜欢上了给我打针的护士小美，因为她打针不疼。”

我的心里有些泛酸，这个也成了儿子喜欢女孩儿的理由之一，要不是他得了这个病，真正的20岁应该是多么阳光的日子啊。

“爸，你去帮我买束花吧，我要送给小美姐姐。”

那一大束玫瑰花几乎淹没了儿子的头。他小心地把花束举到小美的面前：

“小美姐姐，今天是我 20 岁的生日，你做我的女朋友好不好？”

小美不好意思地接下了花，儿子在小美脸上亲了一下：“谢谢你，小美姐姐！”

就算在吃药打针的时候，儿子也在与我商量接下来的日子里应该做些什么。他身体越来越虚弱，但依然改不了孩子的天性，只要精力尚好，就会舍弃轮椅自己走路。

一岁生日那天，小美拿来化妆品，给儿子在脸上扑了一点儿胭脂，他苍白的脸上立即泛起了红晕。儿子有些不好意思：“爸，我是男孩子，怎么也要化妆？”“因为我们要拍照，周岁纪念啊，当然要化妆，漂漂亮亮的……”儿子在我的怀里吹灭了一岁的生日蜡烛。

儿子“满月”的时候，已经很虚弱了。他想动一动，可已经没有力气了，我知道他随时可能离开我。忍住泪，我柔声对儿子说：

“宝贝，你不要动，刚刚满月的孩子只会哭和笑，不会讲话。”

儿子有些明白地点点头：“那我不能说话了？”他记起自己其实不应该说话，赶紧向我道歉，“爸，我忘了……”

“宝贝，刚满月的宝宝除了吃就是睡。楼下阿姨生的宝宝整天吃了就睡，甚至吃的时候也在睡，你还记得吗？”我的提醒让儿子好好想了想，他终于点了点头。不过我又害怕自己错过了儿子想说的话：

“宝贝，如果你愿意和爸爸说说话，也可以说的……”我只是希望他能够多保存一点儿精力，多坚持一下，多陪陪我这个老爸。

儿子在我的臂弯里睡了很久很久，终于醒了，精力似乎很好，挣扎着要下来自己走走。

我们走到医院天台，一起看落日，儿子拉着我的手：“爸爸，谢谢你，

我过得很开心……”

我知道孩子快要离开我了。我抱着他，像真的抱着一个刚刚满月的孩子，哼着摇篮曲，轻轻摇着他。

儿子的眼睛慢慢闭上，像熟睡了一样，就好像某一天，他睡够了，就会醒来……

